

「話し言葉」を用いた原稿作成によるスピーチ教育の有効性

～「ん」系変化に注目して～

宮本 淳子

抄 録

本稿では、音声表現や非言語コミュニケーションによる指導・評価に偏りがちな日本の（日本語母語話者のための）スピーチ教育における、話し言葉による原稿作成指導の有効性について、原稿内の話し言葉とスピーチに対する意識調査の関係をもとに、明らかにすることを試みた。具体的には、30人の短大生が作成した複数のスピーチ原稿を対象に、話し言葉の特徴の一つである「ん」系変化を含む原稿の割合を個別に算出し、スピーチに対する意識別グループでの平均値を算出した。その結果、「スピーチが好き」と回答した学生たち（A群）の平均値が最も高く、次が「スピーチが苦手」と回答した学生たち（C群）、最も平均値が低いのが「どちらとも言えない」という学生たち（B群）だった。この結果と授業の感想を踏まえ、A群は話し言葉の運用能力が高いこと、C群はスピーチ力向上への意欲から原稿作成に熱心に取り組むため、意識的に話し言葉を使用する傾向が強いこと、B群は、スピーチ力向上への意欲が低いことに加え、話し言葉の運用能力も低いことから、原稿内での話し言葉の使用が少ないことが分かった。以上のことから、どのグループにおいても、話し言葉の運用能力を客観的に知ることができ、スピーチ実践以前の段階で改善の工夫を促すことができるため、スピーチ教育における話し言葉を用いた原稿作成指導が有効であると結論付けた。

0. はじめに

本稿は、日本語母語話者のスピーチ教育における「話し言葉」に焦点をあてた原稿作成による指導について、原稿内で用いられる「ん」系変化とスピーチに対する意識調査結果に注目し、その有効性を示すことを目的としている。

2013年は東京オリンピック招致のためのプレゼンテーション¹をはじめ、サッカー日本代表の試合観戦後に街にあふれるサポーターの雑踏警備にあたった警察庁機動隊員のアナウンス²が脚光を浴びるなど、情報の「伝え方」が注目を集め、日本における「伝え方元年」³とも言われた。他者に何かを伝えるための日本語表現は、「書き言葉」と「話し言葉」に分けられるが、「伝え方元年」として注目されたのは主として後者である。日常生活において他者との意思疎通を図るための音声コミュニケーションである話し言葉は、私たちにとって大変身近なものである。その身近さゆえ、日本語母語話者が日本語の話し言葉について改めて

¹ 2020年に開催されるオリンピック・パラリンピック招致を目指し、2013年9月7日、オリンピック東京招致委員会が、アルゼンチン（ブエノスアイレス）でのIOC総会で行った最終プレゼンテーション。

² 2013年6月4日、サッカー日本代表が2014 FIFA W杯アジア予選においてW杯出場を決めた夜、渋谷駅前前で、サポーター群衆に対し、ユーモアを交えた話術でルールを守るよう呼びかけた。

³ ダイヤモンド社書籍オンライン <http://diamond.jp/articles/-/43893>（2014年9月15日）

学習する機会は、書き言葉に比べ格段に少ない状況にある。日本の母語（「国語」）教育においても、作文や文章読解など、書き言葉が重視され、評価の対象となる傾向が強いことは否定できない（山本，2011）。ところが、2013年が日本における「伝え方元年」と称されるように、近年、日本国内でもプレゼンテーションを中心とした「伝える技術」や「話し方」に注目が集まり⁴、「話すこと」への関心は高まっていると言える。仕事上での「話す技術」の向上を目的に、意識的にスピーチ技術を習得しようとする社会人も増えている。

ただし、これまでの学校教育における日本語母語話者に対するスピーチ教育⁵では、内田（2011）も指摘しているように、一般的に「大きな声」で「堂々」と「笑顔」で「滑舌良く」等、音声面や非言語コミュニケーション面の観点が主たる指導・評価の対象となる傾向があったと言わざるを得ない。そのような日本のスピーチ教育を通して、スピーチが苦手な者の中には、発声や滑舌が克服できればスピーチ力が向上すると短絡的に考えてしまう人も少なくない。実際のところは、発声練習により腹式発声ができるようになり、大きな声が出せるようになって、話の内容に自信が持てなければ、声は小さくなるであろうし、いくら滑舌が良くても、選んだ言葉が、その場に相応しいものでなければ聞き手からの好印象は期待できない。つまり、スピーチ力を向上させるためには、スピーチ原稿の作成能力（話す内容）を向上させなければならない。せっかく労力を注ぐのであれば、発声や滑舌などの話し方よりもスピーチ原稿の質を向上させるほうが先決であり、それがスピーチの神髄（佐々木，2012）と言える。

もちろん、これまでもスピーチにおける原稿作成の重要性について言及されていないわけではない。内田（2011）は小学校の国語におけるスピーチの指導において、文章構成（発表）の型を重視することで、一定の効果が得られることを示している。しかし、「話し言葉」による原稿作成に注目した研究は管見の限り見当たらない。筆者はスピーチにおける話し言葉の使用とスピーチ力の向上には、何らかの関係があるのではないかと考える。なぜなら、筆者は2000年から2012年まで、ラジオアナウンサーとして番組作りの現場に従事しており、自身が担当する番組における、いわゆるフリートーク（自分の意見を自由に話すトーク）に対し予め原稿を作る場合、話し言葉を特に意識していたからである。ラジオは音声表現のみのため、同音異義語や漢語表現等はできるだけ避け、耳で聞いて分かりやすい言葉選びをすることはもちろんのこと、日常会話での使用頻度が高い文頭の「で」「ま」「まっ」、語尾の「ね」「よね」なども含め、話し言葉による完全原稿を作成することで、文章全体の言葉のバランスを考え、より自然な語りかけとして聞き手に伝わる原稿作りを目指していた。一般的に、完全原稿を準備し、それを読むだけのスピーチほど聞くに堪えないものはないと酷評されることが多いが、それはおそらく「書き言葉」による原稿の朗読を指していると考えられる。原稿が「書き言葉」である場合と「話し言葉」である場合とでは、印象が異なるはずであるが、これまで話し言葉での原稿作成を意識していた者は、それほど多くないと考えられる。また、聞き手としても他人のスピーチを書き言葉なのか話し言葉なのかという視点で注

⁴ プレゼンテーションを題材としたNHKのテレビ番組「スーパープレゼンテーション」（NHK教育テレビジョン）の放映は2012年4月からスタート。佐々木圭一（2013）「伝え方が9割」は年間ベストセラー単行本第2位（2013年ビジネス部門／トーハン・日販調べ）・2013年ビジネス書ランキング1位（紀伊國屋書店新宿本店調べ）を獲得している。

⁵ ここで言うスピーチ教育とは、国語の授業はもちろん、複数人の前で何かについて発表をする（朝の会・帰りの会などにおける1分間スピーチなども含む）指導のことを指す。

目していた者は少ないであろう。

そこで、本稿では、学生のスピーチに対する意識（好き・嫌い・どちらでもない）調査と原稿における話し言葉の使用との関係进行分析し、話し言葉を用いた原稿作成によるスピーチ教育の有効性について探っていく。

1. 話し言葉の指標としての「ん」系変化

本稿では、話し言葉の特徴の一つであり、ほとんどの日本人が日常会話では無意識のうちに使用しているであろう「～なんです」のような「ん」を含む話し言葉（「ん」系変化）に注目する。これは、本来、書き言葉では「～なのです」と「の」が使用される表現である。「なのです」については次のように定義されている。

【な の ・ です】

（連語）形容動詞の語尾または助動詞「だ」の連体形「な」に助詞「の」が付き、さらに丁寧の助動詞「です」の付いたもの。話し言葉では「なんです」となることが多い。連語「なのだ」の丁寧な言い方として用いられる。『三省堂 大辞林』

話し言葉では「なんです」となることが多いと指摘されているように、実際、筆者が自身のラジオ番組のトーク部分を文字化した宮本（2014）においても、「の」に比べ「ん」系変化の話し言葉の使用が圧倒的に多く確認でき、話し言葉の代表的な特徴の一つであることが分かる。日本語教育における話し言葉と書き言葉の相違点をまとめた山本ら（2003）においても、話し言葉の特徴として、書き言葉と比較して述部ほど「の（ん）だ」「の（ん）である」「の（ん）です」「の（ん）であります」等が多用され、特に強調文においてよく使われると指摘されている。

書き言葉同様、話し言葉でも語尾のバリエーションはスピーチ全体の印象に影響を与える重要な部分である。「～でした」や「～です」の繰り返しが多いスピーチは、単調になりがちで、陳腐な印象になりやすい。それに比べ、「～なんです」は自然な話し口調を印象付けることができ、語尾のバリエーションが増えるため、スピーチにおいては積極的に活用したい表現の一つである。

しかし、「～なんです」に代表される「ん」系変化を含む話し言葉は、日本の母国語（「国語」）教育における作文指導では、書き言葉ではないため添削の対象となる。つまり、文章を作成する場合、学生たちは「～なんです」より「～なのです」や「～です」という表現に慣れていると考えられる。学生たちのスピーチが、生き生きと「語る」＝「伝える」音声表現になりにくい理由の一つに、この「～です」や「～でした」といった語尾ばかりが単調に使用されることや、「～なのです」という書き言葉の状態のまま読むことから抜け出せず、書き言葉の壁を乗り越えることができない点が挙げられる。自然な話し言葉を意識したスピーチであれば、日常会話（普段使っている言葉）に近い話し方を、意図的に取り入れる必要がある。それならば、スピーチ原稿では、本来、この「～なんです」のような「ん」系変化を含む話し言葉を適宜、用いることが望まれるのである。

ただし、本来、「話し言葉」と「書き言葉」については、一つの基準で明確な線引きをすること、すなわち古典的カテゴリーとして考えることは難しい。典型的な話し言葉、典型的な書き言葉といったものを考え、その典型にいかにかに近いのか、あるいは「話し言葉らしさ」「書

- スピーチ（人前で話すこと）に対しての「意識」について
「好き」「嫌い」「どちらともいえない」から一つ選択して下さい。

調査対象としたスピーチ原稿は、スピーチに関する授業において提出されたものである。尚、スピーチ原稿は30人全員から回収しているが数は各自で異なる。理由は以下に示す授業におけるルールによるものである。

授業ルール（2014年度・全15回）

- スピーチ原稿の提出＝5ポイント
- スピーチの実演（制限時間2分）＝10ポイント
- スピーチの実演はあくまで立候補制とし、強制することはない。
- 最終授業までに60ポイントを獲得することが最終課題への条件となる。

つまり、毎回出席していても、60ポイントを獲得できなければ、最終課題に取り組むことができず、単位を習得できない。また、学生には、提出する原稿についてメモ（箇条書き）ではなく完全原稿を作成すること（発表の際には原稿を見ても見なくても良いこととした）、特に「話し言葉」を意識して原稿を作成することを指示した。

ちなみに、授業の前半を主にスピーチ実践の時間とし、後半ではスピーチの構成手法に関する講義を行った。毎回、次回の授業でスピーチをする希望者を募り人数調整を行ったが、ほとんど希望通りにスピーチ実践を行うことができた。

3. 結果と考察

スピーチに対する意識調査・提出原稿の本数・「ん」系変化を含む原稿の枚数・総原稿数に対する「ん」系変化を含む原稿の割合・「ん」系変化をしていない「～のです」を含む原稿の本数の結果は【表1】の通りである。「スピーチが好き」が10人（A1～A10）、「どちらとも言えない」が10人（B1～B10）、「嫌い」が10人（C1～C10）であった。

まず、スピーチ原稿の「数」に注目する。原稿数はA群が最も少なく、次にB群、C群の結果となった。A群は、「スピーチが好き」と回答しており、人前で話すことに対する精神的な抵抗が低いと考えられる。授業で実際にスピーチを「実演」することで点数を獲得できるため、原稿数が最も少ない結果となったと考えられる。逆にC群は「スピーチが嫌い」と回答しており、授業内でのスピーチ実践をできるだけ避け、原稿を提出することで得点を獲得しようという意識が働いているため、原稿数が多くなる傾向にあったと考えられる。スピーチの実践（人前で話すこと）に対する精神的な抵抗感が如実に原稿数に現れた結果となっている。

【表 1】

	スピーチに対する意識	総原稿数 (本)	原稿数平均 (本)	「ん」系変化 を含む原稿数 (枚)	「ん」系変化 出現率 (少数点以下 四捨五入)(%)	「ん」系変化 出現率の 平均値(%)	「～のです」を 含む原稿(本)
A1	好き	8	6.9	5	63	59.4	5
A2		10		3	30		4
A3		8		6	75		2
A4		5		1	20		2
A5		6		4	67		2
A6		9		5	56		8
A7		6		3	50		3
A8		5		5	100		2
A9		6		5	83		0
A10		6		3	50		2
B1	どちらとも いえない	11	7.8	5	45	28.1	3
B2		5		1	20		3
B3		8		2	25		4
B4		9		3	33		0
B5		7		6	86		1
B6		10		1	10		3
B7		4		0	0		4
B8		3		0	0		1
B9		8		0	0		4
B10		13		8	62		8
C1	嫌い	13	9.4	3	23	49.8	4
C2		8		2	25		1
C3		7		2	29		1
C4		9		5	56		2
C5		10		5	50		7
C6		10		5	50		4
C7		11		5	45		3
C8		11		11	100		1
C9		8		5	63		4
C10		7		4	57		2

次に、30人それぞれの原稿において、総原稿数における「ん」系変化を含んだ（原稿中に一カ所以上「ん」系変化が確認できた）原稿の割合を算出し、A・B・C各群の平均値を算出した(表1参照)。結果は、A群＝平均59.4%、B群＝平均28.1%、C群＝平均49.8%であった。また、A群とC群には、全ての原稿において「ん」系変化が含まれていた含有率100%の者が1名ずつ存在し、逆に、B群には「ん」を全く含まない者が3名いた。

まず、最も「ん」系変化を使用している結果となったA群は、「話し言葉」の運用能力が高いと考えられ、実際のスピーチでも話し言葉を用いることができるため、自然な話し口調でスピーチできる可能性が最も高いと考えられる。アンケートで「スピーチが好き」と回答していることから、これまでのスピーチ経験を通して、それなりの手応えや達成感を感じているはずである。その達成感、自分のスピーチ時の言葉・話し方が普段の会話口調に近い言葉＝話し言葉だからこそ、緊張感も和らぎ、通常の自分の話し方との大きな乖離もない

ため、「自分らしく話すことができた」と感じられる点も大きく影響していると推測できる。そして、話し言葉でのスピーチがある程度、無意識にできているからこそ、原稿を書く際も自然と話し言葉を使用していると考えられる。無意識である可能性が高いのは、原稿内で全ての「～のです」が「ん」系変化となっているわけではなく、「～のです」のままとなっている部分も存在するからである(表1参照)。しかしながら、例えばA9は、全ての原稿内で「～なのです」は使用されていない。この点で、A9は、スピーチの際は話し言葉を使用することが無意識にできている、又は、意識的に「話し言葉」と「書き言葉」を区別し、話し言葉でのスピーチ原稿を作成することができていると考えられる。ただ、それ以外のA群は、まだ話し言葉に対する意識が徹底できていないと推測される。つまり、スピーチに対して自信があると思われるA群においても、話し言葉による文章作成により、意識的に話し言葉と書き言葉を区別することへの注意を促し、話し言葉の運用能力を向上させていく指導の余地があると言える。

一方、C群はスピーチに対する苦手意識があるにもかかわらず、この授業を自ら履修しており、自分のスピーチ能力を向上させたいという気持ちがあると考えられる。そのため、教員の指示に忠実に話し言葉を意識的に使用し、それを確実に実行(音声表現)することで、スピーチを成功させたいという意欲が「ん」系変化の使用に現れていると考えられる。つまり、C群は原稿を抛り所にスピーチしようという気持ちが強く、原稿作成に力を注いでいると考えられる。しかし、まだ全員の原稿に「～のです」の書き言葉表現を用いている部分があり、更なる話し口調でのスピーチ原稿に改善できる余地があることにスピーチ実践の前段階で気付くことができる。特にC5は「～のです」を多く用いており、これらを「ん」系変化の話し言葉に変えることにより、スピーチの印象の変化が大きく期待できる。

C8は、全ての原稿において「ん」系変化が確認できたが、アンケートの自由記述で次のようにコメントしている。

「話し言葉で原稿を書くというのは、最初、違和感を感じたけれど、新鮮で面白いなと思いました。それに圧倒的に話しやすくて、安心感がありました。」

これまで慣れていなかった話し言葉を意識したからこそ、「違和感」を感じたのであろう。このような感想からも、かなり話し言葉を意識して原稿を作成していたことが分かる。また、C8のように、スピーチに対して「嫌い」という意識をもっていた学生が、話し言葉による原稿により「話しやすさ」や「安心感」を得ることができれば、スピーチに対する苦手意識を払拭するきっかけにもなることが期待できる。

「ん」系変化の話し言葉の出現率が最も低かったB群は、スピーチに対して「好きでも嫌いでもない(どちらともいえない)」との意識であることから、少なくとも、これまで、スピーチが「嫌い」になるような経験は無かったと考えられる。つまり、これまでのスピーチ(人前での発表)経験で、「それなりのスピーチができる」という気持ちがあると推測できる。メモ程度の原稿があれば、スピーチができるという経験や手応えが、原稿作成へのモチベーションを高められない要因となっているのかもしれない。

すなわち、スピーチにおいて「メモ書き」で話すことに慣れ、完全原稿を作成しなくても、ある程度のスピーチができる経験をしていると思われるB群は、原稿に対する依存度が低

いため、原稿作成に真剣に取り組めていないと考えられる。スピーチが「好きでも嫌いでもない」状態とは、いわばスピーチに対して「無関心」に近いと言える。だからこそ、貪欲にスピーチ力を向上させようとするC群のような意欲も乏しく、話し言葉も意識できていない結果になっていると推測できる。しかも、そのような精神状態で原稿を作成した場合、書き言葉の文章になっていることから、A群に比べると明らかに、話し言葉の運用能力は低い状態にあると考えられる。

さらに、全ての原稿において「ん」系変化を全く用いていなかった「ん」系変化出現率0%が、全員B群であった点にも注目したい。3人は文章を作成する場合、基本的に「書き言葉」が優先されており、話し言葉を意図的に用いることに慣れていないことが明らかである。もちろん、日常会話では「ん」系変化の話し言葉を用いているはずであるが、少なくとも学校の課題として提出する「文章」として取り組んだ場合、「文章＝書き言葉」が染み付いていると考えられる。このような学生は、自身が話し言葉を運用する力が低いことを自覚していないことが予想され、スピーチ教育では特に注意深く指導すべき対象である。

もちろん、原稿への依存度が低いB群では、実際のスピーチの際は、原稿では書き言葉（「～なのです」）を話し言葉（「～なんです」）に変えて使用しているケースもある（記録データとして録画した映像と提出原稿を比較して確認）。しかし、全てを話し言葉に置き換えることができていないため、書き言葉と話し言葉が混在し、スピーチにぎこちなさが感じられる。また、語尾が「～でした」や「～です」の繰り返して単調になる傾向もB群の原稿には顕著にみられた。

原稿への依存度や原稿作成への意欲を示すデータとして興味深いのがB6である。彼女の提出した10本の原稿のうち、「ん」系変化の話し言葉が使用されているのは1本のみであるが、この原稿は成績評価に直結している最終スピーチ課題で発表するための原稿であった。通常は、あくまで課題をクリアするために提出するためだけの原稿であり、実際にスピーチすることは想定せず、ある意味、適当に原稿を作成していたものの、最終課題に対しては、確実に評価に繋げるため、また自身が人前で実際に発表することから、原稿を真剣に作成し、取り組んだ結果が「ん」系変化の話し言葉の多用に反映されていると考えられる。それを裏付けるようにアンケートの自由記述では「スピーチに原稿はいらない。原稿があると、それに縛られるし、話し方も淡々とする。」と述べている。このような考え方から、原稿作成への意欲が低いことが理解できる。B6のように、自身の発表を意識した場合に「ん」系変化の話し言葉を使用できる学生は、話し言葉の運用能力が、ある程度備わっていると考えられる。このような学生は、実際のスピーチでは話し言葉が使用され、比較的スムーズな発表ができるため、教員側も高い評価をしがちである。しかし原稿における話し言葉の使用に注目することで、教員の指導を忠実に実践しておらず、スピーチの印象を左右する語尾のバリエーションがないことが把握でき、スピーチ力向上への意識の低さも指摘できる。またB6をはじめとしたスピーチ能力の向上にあまり関心のない無関心層に対し、「話し言葉」を意識した原稿作成により、実際には「書き言葉」に偏りがちな文章作成能力を客観的に指摘し、スピーチ力を上げるための語尾のバリエーションや言葉・表現の選択について、有効な指導することができると考えられる。

そもそも、スピーチにおける「話し言葉」の使用の重要性については、これまでも指摘されてきた。長野（1995）では、スピーチ練習における「ことばの使い方」として書き言葉と

話し言葉の違いを考えることの重要性を指摘しており、話し言葉の場合は出ては消えていく音として、聞いて一度でよくわかる言葉が強く求められるゆえに、多義的にとらえられるようなまぎらわしい言葉を使わず、明確で適切な言葉を使うことの大切さを指摘している。スピーチ原稿の作成に重点をおいた佐々木（2012）でも、難しい熟語を使わずに、中学生でもわかるぐらいの平易な言葉で書くことを指摘し、耳で聞いて分かりやすい話し言葉を使用することには言及している。また、石井（1988）でも、「よい話し方、じょうずな話し方」と題して同音異義語や多義語に気をつけることを指摘している。ただし、いずれも「～なんです」に代表される「ん」系変化のような話し言葉特有の変化に注意することまでは言及されていない。言及されていないものの、石井（1988）においては、自身が行ったスピーチ原稿が完全文として5つ掲載されており、その全ての原稿の中に「～なんです」のような「ん」系変化が確認できた。また、中学校・高校における「話すこと・聞くこと」の授業作りに関する門戸ら（2014）においても、「話し言葉の特徴を意識させる」ことに関して、特別な指摘はされていないものの、例として示されたスピーチ文では「ん」系変化が用いられていた。

加えて、筆者が自らのラジオ番組でのトーク部分を文字化した原稿も掲載している宮本（2014）でも、スピーチ原稿を書く際のポイントとして「普段の言葉で話す」という項目はあるものの、「ん」系変化のような、日本語母語話者にとって日常会話では無意識に使用されている話し言葉について、特に意識するよう、指摘する項目は立てていなかった。

日本語母語話者にとっては当たり前すぎる話し言葉の「ん」系変化について意識する機会が少なかったことは否定できない。だからこそ、今回、スピーチ原稿内の「ん」系変化の使用に注目し調査してみると、「の」から「ん」への変換をしていないケースが目立ち、学生にとって意識的に話し言葉を使用することが難しい現状が浮き彫りとなった。これまでの話し言葉を意識したスピーチ教育の中で、「ん」系変化は盲点だったと言わざるをえず、今後のスピーチ教育においては、スピーチの基礎力として習得させる必要があるであろう。

4. 授業の感想（自由記述）と考察

A群の感想

- ・今までは成りゆきで話していたことが多かったのですが、原稿を書いた方が緊張も少ないし、自信が持てるのでいいなと思いました。
- ・今まで、思いついたことしか人前で話してこなかったので、前準備があると安心感があった。原稿をつくる時にスピーチしている時をイメージしているから、実践の時は結構落ち着いている。
- ・話すことに自信が持てるようになりました。
- ・何を言うか決まっていて、途中で止まっても手元に答えがあると思うと安心するので、原稿は必要だと思いました。
- ・原稿を作成することで、自分が成長できていることが分かって、話すことが好きになった。（一文を短くする、など）
- ・原稿を読んでいる感が拭えない。
- ・原稿があったほうが確実に安心する。

A群には、これまで「なりゆき」や「思いつき」で話しをしてきたとの記述がみられた

のが特徴である。スピーチに対して「好き」と回答している感覚は、アドリブ的なスピーチから得られていたものであることが分かる。A群の中で、このような記述をしている場合は、人前でも話せるという積極的で外交的な性格や精神面の強さが功を奏してきた可能性が高く、原稿作成を促すことで、内容面での向上が期待できる。一方で、原稿を読んでいる感が拭えないとする記述もあったが、これは、原稿を作成した後、それをより自然な音声表現への導く指導が必要であることを示唆している。

B群の感想

- ・原稿は本当に大事だと思いました。原稿なしだと、素が出て面白いような気がするけど、それは友だちと話すことだよな、と思うこともあったので、原稿ありきでやった方が聞きやすかった。
- ・原稿があると少しだけ気持ちにゆとりができる。
- ・文章があらかじめあるので、時間配分を気にしながら話さなくてもいいから、あまりこわくなかった。
- ・原稿を作成してからのスピーチ実践をしてみて、原稿があることでスピーチの構成や展開についてのイメージがしやすくなった。
- ・スピーチ原稿があれば、緊張して話に詰まったとしても用紙を見て、落ち着きを取り戻せました。
- ・完全に文章を読んでます感があるか、演劇みたいな話し方の人ばかりで聞いていて辛かった。(カンペはあるべき)
- ・安心してスピーチができると思いました。
- ・今まで自由に書くことが多かったので、構成とかは気にしていなかった。

A群ではスピーチ原稿を作成してスピーチ実践をすることで「安心」という感覚を持った者がいたうえ、「自信が持てた」との感想があったものの、B群では安心感でとどまっており、「自信が持てる」感覚までには至っていないようである。「話し言葉」というキーワードが出ていないことや「ん」系変化の話し言葉の出現データからみても、話し言葉への意識が低く、話し言葉での自然なスピーチができたという感覚が低いと考えられる。また、実践を通しての「手応え」についての記述が他の群に比べ少ない。これは、授業への取り組みの姿勢が消極的であることも影響していると考えられる。

C群の感想

- ・原稿があった方が、落ち着いて話せると思いました。
- ・はじめはとても大変で、どのように書けばいいのか分かりませんでした。やっていくうちに「次は何にしようかな」など、だんだん楽しくなってきました。
人前で話すのもいいかなと思いました。
- ・書き言葉で文章を作ってばかりいたので、話し言葉で原稿を書くのに苦労しました。
- ・安心感があり、文章力があがった。
- ・書き言葉と話し言葉では違いがあるので、それを意識することが大変だった。
- ・アドリブで言うよりも、原稿があると正確に伝えたいことが言えました。

良い原稿ができていれば、しっかりとしたスピーチができると思いました。

- ・自分の気持ちや言いたいことを最初にまとめておくと、本番で言い易くなると思った。

C群では、他のグループでは言及されていない「話し言葉と書き言葉」についての記述が複数あった。これは、やはり自身のスピーチ力を向上させたいとの想いから、授業の趣旨に従って、話し言葉の使用を強く意識していたからであると推測できる。しかも話し言葉の使用に「苦勞した」ということから、かなり意識的に話し言葉を用いようとしていた努力が伺える。また原稿を作成しスピーチすることにより、これまではなかなか得られなかったスピーチ後の達成感があったことも分かる。このような感情は、スピーチに対する苦手意識の払拭には欠かせない要素であろう。

5. まとめ

本稿では、日本語母語話者のスピーチ教育における「話し言葉」に焦点をあてた原稿作成による指導について、これまで日本語母語話者が無意識のうちに日常会話で使用してきた「ん」系変化に注目し、その有効性を示すことを試みた。その結果と授業後の感想から、スピーチに対し、「好き」という肯定的イメージを持つ学生は無意識レベルで「話し言葉」によるスピーチが、ある程度できていることが分かった。しかし、その「話し言葉」が無意識である場合、よりスピーチ表現力（文章力での伝える技術レベル）を上げるためには、意識的に話し言葉を用いた完全原稿を作成できる能力が必要である。それを見極めるための基礎資料として、話し言葉による原稿がスピーチ指導で果たす役割は大きい。また、話し言葉と書き言葉の区別が意識的にできる段階にある学生に対しても、語尾の繰り返しを避け、バリエーションを増やしたり、漢語や同音異義語の使用を避け、耳で聞いて分かりやすい言葉を選択したりすることなど、細かな部分をスピーチ実践の前に教員が指導したり、各自で推敲し練習できるため、話し言葉による完全原稿の作成が効果的であると言える。

一方、スピーチに対し「好きでも嫌いでもない」という学生は、スピーチに対する抵抗感はないものの、原稿への依存度が低いために、話し言葉を意識した原稿作成への意欲が低いことも分かった。このような層は、（それなりの声の大きさや堂々とした態度が出来る場合が多く）スピーチの実践ではある程度のレベルをクリアできてしまうことが予想され、音声面からの指導よりも原稿による指導が効果的であると考えられる。話し言葉による原稿作成によるスピーチ教育では、特にスピーチの実演において見過ごされがちな、このような無関心層（本稿ではB群）に対する働きかけを行えることがメリットである。話し言葉と書き言葉を意識的に区別する力が備わっていないことを自覚していない学生に対し、原稿での書き言葉の使用を指摘することで話し言葉の運用能力が低いという弱点を明らかに示すことができ、学習意欲を刺激することができるはずである。

また、スピーチに対して「嫌い」という意識のある学生は、自分のスピーチ能力への不安から、確実に原稿を作成しようという意識があり、（大学のように自主的に授業を履修している場合）、自分のスピーチ能力を向上させようという意欲があるため、教員の指示に忠実に「話し言葉」を意識しようとしていることから「ん」系変化の使用も多くなっていた。このような学生に対しては、原稿を確実に作成しておくことによる安心感により緊張を緩和することで、スピーチの音声面の指導に繋げていけるはずである。スピーチが苦手な学生のほ

とんどは、スピーチ時に話すことを忘れてしまうという不安や、聴衆からの視線に対する不安、話す内容への不安など、何らかの「不安」を抱えている。事前にスピーチ原稿を作成し、その内容について、教員など第三者が客観的に指導することで、内容面での不安を払拭できれば、音声表現にも変化が期待できる。この変化については、今後の研究課題である。

自然な話し言葉による文章作成能力があってこそ、音声表現の力が生きてくる。スピーチ指導は、文章力と音声表現力が融合してこそ、最大の効果を発揮できるはずである。スピーチの目的は「相手に伝わること」であり、どのように伝えたら理解してもらえるのかという文章力を侮ってはいけない。しかも、実際に声を出しながら原稿を作らなければ、なかなか書き言葉を脱することができない。声を出しながら原稿を作成することにより、話す内容がある程度覚える効果も期待できる（実際に今回の授業感想でも、「原稿をつくる時にスピーチしている時をイメージしているから、実践の時は落ち着いている」とのコメントがあった）。話し言葉を意識的に文字化する作業を続けることで、「話し言葉」と「書き言葉」の違いを学習し、それらを使い分けできるスピーチ力の土台を築くことが大切である。そのためにも、話し言葉を意識したスピーチ原稿作成がスピーチ教育の基礎段階で必要であると考えられる。

佐々木（2012）は、スピーチについて、原稿なしで、聴衆と終始アイコンタクトを交わしながら話ができれば理想だとしつつも、アイデアを練り、心から聴衆の役に立ちたいと思いつつ話す内容を整理し、原稿をつくり上げていく過程で、自ずと魂がこもり、考え抜いて原稿を作成したならば、ほとんど原稿を参照しなくとも話せる場合が多いと述べており、感動のカギはスピーチ原稿にあるとしている。水谷（1998）も指摘しているように、棒読みを前提とする原稿作りと、生き生きとした話をするための訓練や準備の段階としての原稿作りでは原稿の役割はすっかり異なるのである。

本稿では、個別の原稿における話し言葉の使用の変化について言及することができなかったが、話し言葉への意識の高まりが、原稿にどのように反映されるのかについても、今後、ケーススタディとして取りあげたい。また、今後は、「ん」系変化の話し言葉を意識した原稿作成を徹底することで、実際のスピーチの「印象」に変化があるかどうか、また原稿作成を踏まえ、本番では原稿を見ずにスピーチできるようにするための指導法についても研究していくつもりである。

参考文献

- 宮本淳子（2014）.「スピーチライティングの心得」篠原出版印刷部
- 内田仁志（2011）.スピーチにおける発表原稿の指導の必要性－発表の型を教えることは有効か『宇大国語論究』（22）76-65,宇都宮大学国語教育学会
- 森山卓郎（2003）.話し言葉と書き言葉を考えるための 文法研究用語・12（特集 スキル 話しことばと書きことば－新・言文一致のエクササイズ）『国文学 解釈と教材の研究』48（12）,15-22,学灯社
- 石黒圭（2011）.話し言葉と書き言葉－初年次教育の基礎資料として『言語文化』48,15-35
- 野呂博子・平田オリザ・川口義一・橋本慎吾（2012）.『ドラマチック日本語コミュニケーション「演劇で学ぶ日本語」リソースブック』ココ出版
- 山本幸子（2011）.高等学校で行われるべき「話す」日本語の教育『共栄大学研究論集』9,61-69

- 佐々木繁範 (2012). 「スピーチの教科書」ダイヤモンド社
- 長野正 (1995). 「日本語の音声表現」玉川大学出版部
- 石井澄雄 (1988) 「美しい日本語で話しましょう」おうふう
- 門戸千幸・高山実佐 (2014). 「話すこと・聞くこと」の授業づくり『日本語学』33-5,82-100
明治書院
- 山本雅子・大西五郎 (2003). 話し言葉と書き言葉の相互関係ー日本語教育のためにー愛知大
学『言語と文化』No.8 73-90
- 水谷修 (1998). 日本人の話しことばコミュニケーション 話しことば その研究と教育を結
ぶ -11- 『日本語学』17(3), 92-99,